

平成5年度 講話会

遺跡を学び、護り、活かす技術

平成5年10月29日



社団法人 土質工学会関西支部

2001年10月29日
遺跡を学ぶ、護り、活かす技術
平成5年度講話会
土質工学会関西支部

平成5年度 講話会

遺跡を学び、護り、活かす技術

平成5年10月29日



社団法人

土質工学会関西支部

目 次

まえがき	1
関西大学工学部 西田一彦	
建設工事における遺跡・文化財のとりあつかい	3
大阪府都市開発(株) 吉村信男	
保存科学・技術の現状と展望	9
奈良国立文化財研究所 沢田正昭	
遺跡保存技術の実務と事例	20
(株)鴻池組技術研究所 中澤重一	
遺跡の調査と保存技術の体系化	28
九州産業大学工学部 山内豊聡	
古墳技術者の知恵に学ぶ	35
埼玉大学工学部 渡辺邦夫	
遺跡の保存と都市計画	47
立命館大学理工学部 山崎正史	

まえがき

わが国には30万にも及ぶ遺跡あるいは埋蔵文化財が存在するといわれている。近年、建設工事の増大にともなって、それらと出くわす機会も増え、開発と保存の問題がますます深刻化する一方、遺跡や埋蔵文化財に対する社会的関心はますます高まっている。そして、これらを適正に保存し、活用することが重要な課題の1つとなっている。このような社会的趨勢に呼応して、わが国政府は1992年、世界遺産条約に批准し、これらの文化遺産を国際的監視体制の下で保護することに協力し、保存活動を進めることになった。

また、わが国では、すでに多くの建築物が重要文化財に指定されてきたが、最近では秋田市の水道施設、群馬県の碓氷峠の鉄道施設などの土木施設も加えられ、文化財の概念と対象が拡大される傾向にもある。

遺跡や埋蔵文化財は、古代人の技術や知恵が結集された岩石や土の構造物であることが多く、また長年月を経ているので、これらを調べることは古代の土木技術の解明とともに、長期の岩石や土の挙動に関する情報が得られるという意味でも土質工学の発展に寄与することが多く、また正しい保存技術の確立にも役立つものと考えられる。

このように、元来、遺跡の保存には、土質工学が果たす役割が大きいはずであるにもかかわらず、従来、限られた研究者、技術者がその都度、工夫しながら対処している状態であった。一方、諸外国では早くから、この問題に対する関心が高く、国際土質基礎工学会では、1981年に研究委員会が設けられ、国内では、1992年にはじめてこれに関する研究委員会が設けられ活動を続けている。

従来、遺跡や埋蔵文化財は、どちらかという開発側から敬遠されがちな対象物であり、したがって、本格的保存技術の開発は必ずしも十分とはいえなかったが、今後は土質技術者自身が深い関心を持つ必要がある。また、新しい機械や材料の開発、いわゆるハイテク技術によって、新しい保存技術が開発され、従来、困難であった問題も解決しうる可能性がでてきている。

さらに、都市開発、地域計画においても、過去の機能重視の考え方から、快適性ややすらぎの要素が求められる時代となり、歴史的環境要素が重視されるようになってきている。そして、遺跡や埋蔵文化財は、この歴史的環境要素の一員として都市計画や造園計画に組み入れられつつある。

このような時期に、当関西支部が本講話会を企画されたことは、まことに時機を得たものと考えられる。

たまたま、この講話会のとりまとめを仰せつかったのも、この分野の第一線で活躍の先生方に話題提供をお願いしたところ、ご快諾を得ることができ、お忙しい中、原稿の執筆、ご講演をいただくことができた。先生方に深く謝意を表する次第である。

平成 5年10月29日

講話会座長 西田 一彦